



目次

第一章 銀盤を舞うふたりの美少女

一 幼馴染の背中

二 小悪魔の誘惑

第二章 天使の無垢な相談奉仕

一 もうひとりの美少女

二 天使の告白奉仕

三 お嬢様天使の背中

第三章 小悪魔の極甘な誘交

一 小悪魔の嫉妬

二 天使をむさぼる狼男

三 天使のプライド崩壊

第四章 堕天使への蹂躪凌辱

一 幼馴染が銀狼になった夜

二 銀狼の淫戯命令

三 天使と小悪魔の合同淫戯

四 狼と百合の戯れ

第五章 成熟途上の肉壺選考会

一 ふたりの奉仕妖精

二 銀狼の独占欲

法的拘束力を持つ重要事項および購入者同意契約

第一章 銀盤を舞うふたりの美少女

一 幼馴染の背中

静謐なスケートリンクでふたりの少女が滑っている。白鳥中学のフィギュアスケート女子部のほかの部員はリンクから上り、ベンチからふたりの練習を眺めていた。彼女たちは嫉妬とも羨望ともつかない視線を送っている。

「おい、休憩時間だ。少し休もう」

コーチの片山慶介はリンクの縁から声を張り上げる。

ふたりはチラッと慶介を見つめて、演技を中断した。そのうちの一人、桐谷真凜は腰に手を当てて、リンクをゆっくりとまわってくる。ショートカットのスレンダーな体つきはバランスがとてもよい。

慶介に近づく、小顔をこちらに向けた。負けず嫌いな切れ長の目が印象的で、キラキラと瞳は光っている。そんな優美な雰囲気似合わない口調で、

「コーチ。大会が近いのに、休憩をとっていたら心肺機能が低下するわ。ほかの部員にペースを合わせようとしなくていいじゃないかい」

返事には慶介に対するリスペクトの念が一ミリもない。

「無理をするな、と言っているんだ」

タオルとペットボトルを渡して、慶介は語気を強めた。

「わかってるわよ。ふうつ、でも後悔だけはしたくないの。安心して。問題ないわ。わたしの練習ルーティンは把握しているのよね？」

息を弾ませて、真凛は見上げてきた。

つるりとした白い頬に汗が流れている。タオルで顔を覆うあいだ、慶介は黙って少女の様子を伺う。赤いトレーナーは柔らかそうに胸元で丸く膨らんでいる。中学三年生になって、急にバストが大きくなったらしい。

「お前の練習メニューは特別だから……わかってるさ」

「それで、真凛の胸に問題でもあるのかしら？」

ビクツとして、慶介は視線を上げた。

タオルの隙間から柔和な切れ長の目がこちらを見ている。怒っているわけではなく、目元を紅くして恥ずかしそうな微笑みをたたえていた。

（なぜ怒らない？）

半年前なら、真凛は激怒していた。最近、その様子が少しずつ変わっている。何気なく胸元に視線を移すと、呼吸に合わせて弾んでいる。アンダーシャツを着ていないのか、襟元から汗が染み込んで変色していた。

「何も問題ない。このあとはプログラムの曲を演技してもらう。それまでにへとへとにならないと困るだけさ」

「それならよかった。でも、今日のマンツーマン指導は、陽菜の番じゃなかったかし

ら？」

「え！？ あー、ちがうはずだ。真凛は弱点を解決するほうに集中しなさい。あの子の練習メニューの兼ね合いもあるけど、いつでも声をかけてくれればいい」

タオルを受け取り、ペットボトルを渡す。

ありがとう、と真凛は蓋を開けてから唇をつけた。ゼリー状の紅い唇が艶めかしく動き、顔は天を向く。白い喉がゆっくりとうねる。ふたたび、トレーナーの布地を張らせる胸が慶介の視線を引き寄せた。

（こんなに成長したものかな……）

ついこの前まではぺっちゃんこの洗濯板だった。それが、明らかに女性らしい発育を感じさせる大きさまで膨らんでいる。爆乳などとは程遠い。しかし、手で覆えば乳房をはつきりと識別できるだろう。

「フフツ、ありがとう……じゃあ再開します」

ふと顔を上げると、真凛は上目遣いでじっと見つめてきた。やはり、嫌悪感や怒気のこもった眼差しではない。

「しようがない。せいぜい、ガス欠にならないように」

「はーいーい」

美少女はクルツと踵を返して、リンクコートに戻る。

黒のレギンスパンツはぴったりとヒップからスケート靴までの脚線に張りついてい

る。ヒップもほどよく成長して、少し丸みを帯びていた。大人の熟尻とはまったく違い、子供っぽさがほとんどを占めていた。

（まさか、このふたりと再会する羽目になるとは）

リンクを滑る桐谷真凜、平川陽菜とは幼馴染の関係にある。ふたりの家は慶介の住む家の両隣にあった。桐谷家、平川家、とも家庭状況が不安定で、慶介に子供を預けることなどしばしばだった。

ただ、慶介の家が一番不幸に見舞われていた。両親を高校進学時に亡くし、スケート選手として推薦をもらい、大学まで進学できたのだ。アマチュア選手を終えたのち、プロに転向するつもりはなく、後進を育成したいと白鳥学園にやってきた。

その頃の隣家の幼馴染が教え子になるとは……。

「コーチ、何かおっしゃいましたか？」

物思いに耽っていると、目の前に陽菜が現れた。

「うお！ 吃驚した……休憩は定期的にとったほうがいい。真凜と陽菜は強化指定選手だし、ケアは入念にしないと……」

慶介の言葉が少しずつ勢いを失う。

おっとりした顔の陽菜に見つめられると、自分が間違ったことを言っているような気分になる。余裕たっぷり的微笑む目はぱっちり大きく、彫りの深い顔で興味深そうにこちらを眺めていた。

「そうですね。自信過剰は禁物です。特に疲れていないので、大丈夫です。ご心配ありません」

「いや、心配じゃなくて、コーチの命令なんだよ。マネージャーみたいに言われてもねえ……ん、ああ、ペットボトルね」

陽菜のピンク色のペットボトルを渡すと、彼女は嬉しそうに微笑んで受け取った。ゆったりした鷹揚な雰囲気は、真凛と正反対の性格を物語る。

（タフだよなあ……）

肩口までかかる流麗な黒髪をポニーテールにまとめている。ボディバランスは真凛と同じように美しい。彼女は競技用の紫色のワンピース衣装を着ており、試合さながらの服装で練習に臨む。

「ジャンプは安定しているようだし、大丈夫だろ。スピンや技のつなぎへの練習をもっとしなさい。そっちのほうが陽菜の課題だろ？」

「そうなんです。でも、感覚的に上手くないなくて……」

陽菜は笑顔を引っ込めて、真面目な表情になる。くびれたウエストに左手をあてて、水を飲み干す。ワンピースのスリットからムチツとした太ももが見えた。身長が高い美少女は脚線美からの豪快なジャンプを武器にしている。

「苦手なのはわかる。だから、練習しないとね」

「あの、練習に付き合ってください。口頭ではなくて……」

「え！？ いや、この前……」

慶介は反射的に真凛のほうへ顔を向けた。彼女はふたりの話を聞いていたらしく、むくれた顔でこちらを睨んでくる。さっきまでの様子とはうってかわり、相当怒っているのがすぐにわかった。

（難しいなあ……）

平川陽菜の武器はジャンプのため、スカートのついた衣装で試合に出場する。豪快なジャンプをより際立たせる狙いがあった。だが、最近、陽菜は肌の露出に羞恥心を感ずると悩みを打ち明けてきたのだ。

プログラムを演出するコーチは別にいるが、全般的な指導担当は慶介のため、断れない相談でもあった。

「技術的な問題じゃないのはわかってるだろう？ 少し自分で取り組む時間は必要じゃないかな。つなぎをよくすれば、別の部分でほころびが出てくると思う。ある程度、陽菜自身で修正する能力を身につけたほうがいい」

「そうかしら。練習のとき、陽菜のオシリを見るのはわたしが悪いとでも言いたいのかしら……だって、いまも慶介は太ももをガン見していたじゃない……」

「おいおい。部活のときにコーチを呼び捨てにするのはやめてくれ」

陽菜の口調がガラッと変わる。

おっとりしたお嬢様系の美少女は、機嫌を損ねると態度が一変するのだ。しかも、

真凛と同じくらい機微に鋭く、気づいていない面持ちですべてを見通しているときも多い。

「今日はほかの部員と一緒に上りなさい」

「ううっ……わかりました」

少し未練がましそうに陽菜は目を伏せた。長い睫毛が震えている。その向こうに綺麗に膨らんだバストが視界に映る。

（やれやれ、ふたりの指導は大変だな……）

半年前にコーチとして就任した。まさか、フィギュアスケートの強豪校のメインコーチを務めることになるとは想定していなかったが、ほかに就職口もなく、自分自身のステップアップも意識して、引き受けたのだ。

そこに、現れたのがふたりの幼馴染のスケーターだった。

「えー、また基礎練習！？」

女子部員が誰もいなくなった室内練習場で、真凛は口を尖らせる。更衣室と隣接した二十畳の部屋には、ランナー機器や筋トレ機器が揃っている。ベージュ色の絨毯の上に立って、大きな姿見越しに慶介を睨んだ。

「三回転ジャンプを飛ぶ練習をしていたな。どの種類のジャンプも失敗している。両足が氷に乗っているときはメリハリのある動きができるのに……」

「以前は恐怖心があるって言うていたじゃない。もう、ジャンプに入るときに何も感じない。これで飛べるはずなのよ」

「実際、飛んでも着氷できていない。原因は筋肉の不足だろう。だから、基礎トレをやってみよう」と……

真凛は陰の相でそっぽを向いた。プライドの高い少女には屈辱的なコメントだったのだろうか。ただ、耳障りな事実であればあるほど、本人は自覚しているはずだ。

「うー、筋トレするのー？」

厭々な表情で少女は腰に両手をあてる。

「誰のためのコーチだと思ってるんだ。本当はトレーニングコーチがいれば、引き継いで終わりなんだけどね……」

真凛の態度に慶介はむっとした顔つきになる。

すると、彼女はおもむろに上半身のトレーナーを脱ぎはじめた。

「服を脱げなんて言っていないぞ！」

「汗を掻いたのよ。薄いシャツに着替えたいの」

少女は部屋の隅に置いたスポーツバッグを指さす。黒いバッグの上には、白の薄手のシャツがあった。

トレーナーを脱ぐと、黒のスポーツブラジャーが露わになる。想像とは違い、たわわな実りはそこにはなかった。ほっとするものの、妙な生々しさにすぐ顔をそむける。

「恥ずかしいのかよ、まったく……」

「えっ？ うーん、よくわからないの……幼馴染だからかな。あの頃の慶介と印象が変わらなかったし……」

ボーイッシュな少女は頓着せずにシャツへ手を伸ばす。それから、何気なくこちらへ顔を向けて、想定外の頼みをしてくる。

「バックホックのテンションを緩めてくれない？ 筋トレなら、別にバストを気にする必要はないから……」

「ええ！？ 俺が？」

「だって、頼める人いないじゃない」

悪戯っぽい表情で真凛は笑う。

（何を動揺しているんだ、俺は……）

女子フィギュアスケートコーチになってから、つい一週間前まで前任の女性コーチから引き継いで一緒に指導していた。その女性コーチは男子部に行ってしまった。そう、元々、慶介は男子フィギュアのコーチになると思っていたのだ。

周囲から信用される理由は「既婚者」にあるらしい。三年前に同級生と結婚している。妻は営業社員で家を空けることが多く、気がついたら倦怠期に入っていた。

「どうしたのよ。早くして！」

「ああっ、ちょっと待てよ」

ジャージ姿の青年の額から汗が噴き出す。相手は幼馴染と言っても、気安くなれ合
いになったら、痛い目に遭わされる年齢である。

ゆっくりバックホックの紐を緩めて、締めつけをゆるくした。風船に空気を注入し
たように、スポーツブラジャーの膨らみが大きくなる。やがて、ブラジャーパッドを
前に押し上げていった。

「お前、隠れ巨乳か？」

ごくりと生唾を飲み込んで、慶介は狼狽える。バニラエッセンスの匂いと甘ったる
いシャンプー、汗の生々しい女臭が青年の鼻腔をくすぐった。急に子供っぽい少女か
ら大人の階段を昇る少女に真凛は変わった。

「声が大きい。ほかの女の子に聞かれたくないの」

前を向いたまま、真凛は首筋を紅く染める。

「ごめん、ちよつとショックで……」

素直に少女へ謝罪した。昔の面影を残しつつも、しっかりと肉体は大人の女に向か
っている。その事実を思い知らされて、慶介は少なからず衝撃を受けた。

今度は真凛のほうが不可解な表情を浮かべる。

「幼馴染のバストがバカみたいに大きくて失望したの？ 陽菜も同じくらいじゃない
かしら。この前、部室のシャワーを浴びたとき、チラッと見えたんだけど。そんなに
ショックなことなの？」

「そういう意味じゃない。五年くらい前まで、真凛と陽菜はウチで預かっていたからな……ふうっ……いや、俺は何を言っているんだ」

すぐに頭を振って、思考を切り替える。

だが、ここで想定外の事故が発生した。

「きやつ！ あっ……慶介！」

「コーチを呼び捨てにするな。それに悲鳴の意味は何だ？」

白いシャツを手を持ったまま、真凛は姿見越しに視線を向けてくる。彼女の眼差しを追ったとき、青年の顔から血の気が引いた。

（なぜ、チャックが……）

失態で片付けられない状況だった。青いジャージズボンのスリットから、怒棒が突き出している。ガチガチに勃起したペ×スは、倦怠期のセ×スを吠え猛るよう、どこにも振り下ろせない情欲の怒張を晒す。

真凛はシャツで美貌を覆い、隙間からチラチラと様子を伺ってくる。

「ちよつと待ってくれ、な、痛いっ……ウオッ」

こんなとき、成人男性でもろくなことはできない。慌ててジッパ―を上げてしまい、精嚢袋が挟まれる。激痛に床へ転がり落ちて、慶介はもんどりうつ。

（マズい、これではただの痴×教師じゃないか……）

幼馴染とはいえ、真凛は恋人でも婚約相手でもない。そんなつまらない言いわけが

通用しない理由もある。

「慶介、大丈夫？」

ボーイッシュ少女は心配そうな面持ちで振り返った。潤んだ瞳と厚い唇、それから予想外に大きい乳房が同時に視界に映る。

彼女はあろうことか、四つん這いになってにじり寄ってきた。

「近づくんじやない。少し時間をくれ……頼む」

慶介は額に脂汗を浮かべて、仰向けになる。

そっと目を閉じた。

棺桶に入った気分で、ゆっくり呼吸をする。煩惱に支配されているうちは勃起がフニャチンになる可能性はない。それならば、精神統一して邪念を追い払うほかはない。

「ふうううつ……すうううつ……」

「深呼吸しても慶介のオチ×チン、どんどん大きくなっているわ。へえ。つき合っている彼氏とは比較にならない長さね。これが大人のペ×スかあ……ふうん」

「は、話し掛けるんじゃない！」

せっかく気分を鎮めようとしても、小悪魔のささやきで全てが水の泡になってしまった。脳内にボーイッシュな美少女の姿がありありと浮かび、ぴちぴちの乳房が露骨に弾んだ。

（あのくらいの大きさがベストなんだ……いや、ちがう！　そんな考え自体、捨てな

くては……」

成熟途上の少女に求めるのは、熟れたボインのオッパイではない。両手でちょうど覆えるくらいの手ごろなサイズ感なのだ。

そんなことを考えていると、肉幹は痩せこけるどころか、胴回りを太くするばかりでちっとも萎える気配がなくなってしまう。

しばらく静寂の時間が経過したあと、真凛は小悪魔らしいしなった声でささやいてくる。

「射精すれば小さくなるんでしょ？ それぐらいならシテあげるわよ。ねえ、オチ×チンでトレーニングの時間を取られたくないの」

切実な事情を織り込まれてしまうと、慶介は何も言い返せない。

「そ、そんなことさせられるはずないだろ」

想像しただけで精を漏らしそうになる。

幼馴染の生徒に手コキをしてもらえば、あつという間に射精するだろう。そんな「淫らな関係」は「逮捕」も同然の犯罪行為だ。許されるものではない。

「だって慶介は真凛の体を見て勃起したんでしょ？ その責任を一緒にとってあげて言っているの。代わりに、次の大会の決勝枠にシード推薦してくれればいいわ」

「お前、それは脅迫というんだぞ……ぐっ」

「だって、可哀そうなもの……ねえ、さわってもいい？」

興味津々な視線が、肉柱に突き刺さるのを感じていた。

二 小悪魔の誘惑

（本気か！？）

恥ずかしそうにペ×スを見つめる視線は落ち着かない。一方、恐怖に慄く様子もなかった。手を伸ばせば届く距離まで近づいてくる。ふわっと甘い匂いが強くなった。

「離れなさい。こっちを見てはいかん」

「普通するときなら、そうだけど……非常事態って奴じゃない？ どうすればいいのかしら。触ってもいいの？」

「ダメ。絶対にダメだ。勃起といやらしい気持ちを抑えるまで、リンクで練習していなさい」

真凛の積極的な態度が気になった。脅迫めいた願いも含めて受けつけられない。たとえ、幼馴染の間柄としても関係ない。

彼女は完全にタメ口になっていた。

「いいけど……それってどれくらいかかるの？」

「わからない。落ち着いたらリンクに行くよ」

「ふうん……そう……」

小鼻を鳴らして、少女は顔を横に向ける。どうしようか思案しているらしい。あまりにも無防備な表情で、スポブラの裾の隙間に指を入れて、パタパタと扇いでいた。

前のめりになった四つん這いの姿勢は、少女特有の妖艶さがあり、慶介の劣情を突く。

「それって、これからもつづくんでしょ？」

目元を紅くして真凛は鋭い眼差しで見下ろしてくる。スポブラの隙間から上乳と下乳がチラツと見える。ぽってりした唇が動く様子に、ビクビクと勃起は蠢いた。

「今後、そうならないように気をつけるさ」

「無理よ」

ばっさりと真凛は切って捨てる。

「どうして言い切れる？」

「過去に同じようなことが数回あったの。男性コーチで真凛や陽菜の体に欲情した変×男。彼らも慶介と似たような言いわけをしたけど、ダメだったみたい。わたしたちに手を出す前に、クビになった」

「そんなことが……」

思春期の真凛の言葉が鋭く突き刺さる。彼女たちの繊細な感性はすでに傷ついていてた。その苦しみは男には想像できないほど深いかもしれない。

（告げ口されても仕方ないな……）

幼馴染で気持ちいが緩んでいたのは、自分なのかもしれない。性的な意識おいつも切り離すのは、男性ならば不可能に近い。

「ねえ、どうして触ったらダメなの？」

「しつこいな。気持ちよくなるからに決まっているだろ」

「それって、慶介にとってはいいいことじゃない」

「生徒に姦淫行為を強要するのは犯罪だ」

そこまで言って、青年は口をつぐんだ。

（俺は何を言っているんだ！？）

これでは真凛に手コキを要求しているも同然ではないか。この場は早く切り抜けたい。チャックもふたたび全開になった。

そのとき、小悪魔な美少女がそつとささやく。

「慶介は真凛のこと好きなの？」

「え！？ 俺には妻がいるんだぞ」

「話を逸らさないで。ただのロリコンなの？ 五年前まで一緒にお風呂に入っていたじゃない。そのときは勃起したことなかったわ」

「ううっ……それは、そうかもしれないな」

自分でも驚くくらい、あっさりと好意を告げてしまう。

「え！？ 本当に？ その場しのぎの嘘に決まっているわ」

吃驚した様子でぐいっと真凛は身を乗り出してくる。

「ちよっと、近い……」

互いの呼吸を感じとれる距離感まで彼女は近づいてきた。キラキラと潤む瞳に慶介

の狼狽する表情が映っている。鎖骨から流れる汗がスポブラを濡らして、乳房の先端の輪郭がくつきりと浮かんでいた。

「どうなの？」

「嫌いではないし、可愛い妹と思っていたからな。五年ぶりに会ったら、まるで雰囲気が変わったし、戸惑ってはいる」

俺は少女相手に何を言っているのかわからなくなる。

「そんなこと聞いていないの。陽菜より好きかどうか？　奥さんより愛しているかどうかよ……」

「妻より愛していると俺が言うと思うか？　そんな軽く……おいッ！　ちよつと待てっ……ぐおおっ……」

「もうっ、イライラさせる性格は変わっていないわね。煮え切らないから、奥さんにも相手にされないのよ」

「お前にそこまで言われる筋合いは……ぐっ、頼む、ああ」

真凛の右手が肉幹を握ってきた。

生意気な口振りとは違い、細い指は震えている。しっかりと力を込められないらしく、そっと添えている所作に近い。そんな拙い姿がさらに青年のムラムラを燃やす。

（たどたどしい仕草で……よけい勃起してしまう）

彼女の表情は不安と羞恥に余裕を失っていた。大人のペ×スははじめて触ったのだ

ろう。性感帯や亀頭の形状を探るような指遣いで、ゆっくりと扱いてくる。

「真凛、やめなさい……」

蚊の鳴くような小さい声で慶介は喘ぐ。

「ほんとうにやめて欲しいの？」

戸惑う眼差しで尋ねてくる。

彼女の指はとても細く美しい。指先まで神経の行き届いた演技が真凛の武器である。その五本の指先がさらっと亀頭部を擦ってきた。

「はうっ、やめないと射精してしまう」

「気持ちいいってことじゃない。続けてあげる。真凛の手で握られないと、射精できないくらい、オチ×チンを馬鹿にしてあげるわ。だから、ね、わたしのことだけ見て欲しいの……」

「大会のシード権は別の話だぞ……ぐほおっ」

手コキと引き換えに生徒を鼻屑したら、すぐに関係を疑われてしまう。それでも、すでにヤバイ状況には違いないのだ。

「実力で勝ち抜いて見せます。だから、もっとわたしだけを指導してください。そうしたら、真凛は……」

そこで真凛は左手でシャツの布地を亀頭に覆いかぶせてきた。劣情がさらに煽られて、慶介は腰を突き出しそうになる。

（陽菜を追い抜きたいのか……）

現状、平川陽菜がエースの存在であった。柔らかい演技力よりも外見から想像も及ばない大胆なジャンプと安定性が彼女の武器だ。

陽菜を追い抜くためには、三回転ジャンプの成功率を向上させなくてはならない。そのためには、彼女につきつきりになる時間を増やす必要が出てくるのだ。

「そうは言っても……んおっ」

「ここが気持ちいいのですか？ コーチ」

「いきなりコーチ呼ばわりしても……ぐおおっ」

真凛の顔つきが悪戯っぽくなる。妖しい笑みが恐ろしく映った。ボーイッシュな少女はまだ堅い肉質ながら、骨の柔軟性は桁違いだ。人差し指の関節が曲がり、亀頭冠のエラに貼りつくと、膣内に挿入した錯覚に駆られる。

「ドクドクって脈打って……コーチのオチ×チンって、別の生き物みたいだわ。ピクピク反応するし……」

「お前がいやらしく触るからだ……ああおっ」

「ふうん、そんなに気持ちいいんだあ……」

慶介の様子を伺って、真凛は顔全体を紅くする。薄い布地越しに左手の中央で亀頭をコロコロと転がしてくる。広い布地に赤黒い亀頭から根元まで隠れてしまい、グロテスクな偉容は少女の目から姿を消していた。

少しずつ、清廉な少女が穢れた小悪魔になるようで、慶介は抗いつづける。

「やめろ。もう、戻れなくなるぞ」

「戻る必要はないわ。だって、コーチは教え子のシャツに射精するんだもん。その代償は払ってもらわないと。真凛の繊細な心もズタズタにされてしまったし。いまさら、なかったことには出来ないわ」

「うっ……くおっ、ちよっ、ぐふっ……」

きゆうつと細い指が肉竿を絞めつけてくると、蒼い快樂電流がひっきりなしに流れた。心地よい痺れが股間を浸す。

（指遣いが少しずつ変わってきた）

誰に教わることもなく、真凛の細い白指は華麗に肉柱を舞う。握られる生々しい感触が胴回りから伝わると、諫言の台詞よりも雄としてのうめき声ばかり飛び出してきた。

「熱いっ……こんなに硬いオチ×チン、はじめて……」

「んおっ、ふっ、もうやめてくれっ……」

「ダメよ。まだ射精してないじゃない。彼氏は簡単に出しちゃったから、拍子抜けしたくらいなの。こんなに耐久性があるのね……慶介のオチ×チンは」

ずばりと真凛は言い切った。

沸々と熱気が少女の指のなかで渦巻く。牡欲のエキスが細い指に誘われて、肉棒の

内部を緩々とせり上がるのを感じた。

（幼馴染に手玉にとられるとは……）

室内練習場に誰も寄せつけないようにしたことが幸いとなり、彼女の暴走の一助になったのかもしれない。

そんな状況も背徳感の炎をさらに大きくする。真凜の指先を弾くぐらい肉棒は漲り、硬く張りつめていった。

「うわっ、かちかちに大きくなっている。怖いくらい」

「ここまで触らなければよかったのに……」

「ふふっ、こんなエッチな人だったのね……慶介は。これから、ずっといやらしい視線で見つめられるのかしら……」

「それはない。んんおっ……」

「オチ×チンをこんなにしていてるコーチ、信用できるはずないでしょ。でも、安心してちょうだい。勃起したら、わたしが射精させてあげるから」

にこりと嗤い、真凜の指は筒になり、肉柱を上下にしごいてきた。摩擦熱が興奮の呼び水となり、精液はぐいっとなとせり上がる。

「いいわ。ほら、真凜のシャツに出していいのよ」

嫌悪と微笑みを隠さずに真凜は左手に力をこめてきた。勢いよく指腹で肉棒の左右を刺激してくる。スポブラが揺らめき、膨らみはじめた乳房の上っ面が痒める。

（ぐっ、もう、あっ……い、イグッ……）

左手の人差し指が親指と一緒に、グイッと亀頭冠を握り上げてきた。けたたましく怒張に快癒を送り込まれて、ひっきりなしに痺れまくる。

やがて、牡棒に何も感じなくなったとき、その瞬間は到来した。

「あぐっ、ぐおおっ……」

「きやあっ……あっ、いやっ……たくさん出ている」

軽いはずのシャツが急に重たくなるのを感じとった。白い布地のなかで、牡棒がビクンツと大きく爆ぜる様子が伝わってきた。ずしっと重い感触をシャツが透いとる。ドピュツ、ドピュツと幾度も跳ねる怒張は終わりのない噴出にすら感じられた。

やがて、脈動が小さくなるとともに、彼の巨棒も鎮静化する。

服装を整えてから、トレーニングを再開した。まさか、生徒に射精させられるとは想像していなかったのか、慶介の視線がよそよしい。

「その状態で下半身を浮かせて……そうそう、膝、オシリが綺麗に上がらないと。右足を上げてみなさい」

「はい、こんな感じでしょうか？」

バランスボールに腹這いになって、真凛は壁の手すりにつかまる。左右の足を上下させる基礎的な練習だ。彼の言いたいことは筋力不足である。

「左右同じくらい足を上げ下げできないとね。できれば、左右どちらの方向でもジャンプできるといいんだが。その練習はやっているよな？」

「ええ。筋トレや滑る練習の合間に……」

鏡越しに真凛は慶介を見た。

刹那、コーチは恥ずかしそうに視線をそらす。

（からかいすぎたのかしら……でも……）

幼馴染の勃起に驚いたのはほかでもない、真凛自身だ。彼の粘り気のある視線を感じるようになったのは最近で、慶介自身、自覚しているらしかった。

「ウェイトトレーニングよりも、バランス感覚の練習を増やしてみようか。筋力は十分あると思うているんだけど、上手く使えていなければ意味がないからね」

そう言うと、彼は真凛を床に立たせた。

「こんな感じだよ」

慶介は床の上でジャンピングする。綺麗なフォームでくるつと空気を切り裂いた。三回転して、見事に着地する。

「床ならわたしも三回転出来るわ」

負けず嫌いに火をつけられて、真凛は口を尖らせた。予備の白いシャツを着た格好で、宙に飛ぶ。シャツが捲れる。

「ああ、危ない……」

着地のときに足がもつれて、少女は青年に抱きついた。生々しい汗の匂いと甘いシヤンプーの香りがふたりを包む。慶介はすぐに真凛から体を離して、しゃがみこんだ。

「もしかして、軽く足を捻ったんじゃないのか!？」

何気ない指摘にどきつとした。右足を触ろうとする青年の手から逃れる。

「多少の怪我はつきものでしょ。特に問題はありません」

大丈夫と言わんばかりに、とんとんと足踏みして見せる。

「体の柔軟性はピカ一だから、大丈夫だろうけど」

心配なさそうに慶介は頷いた。

そのとき、彼の視線が落ち着かない様子に、真凛は顔をしかめる。

「ねえ。さっきのこと、まだ引きずっているの？」

「当たり前だろ。あんなことを……俺とお前はコーチと生徒の関係なのに」

腕を組んで青年は顔を紅くする。

（鈍感なんだから、もう……）

好きでもない相手のペ×スを手にするはずがない。真凛は純粹に慶介に対して好意を抱いていた。その表現方法がわからないため、ついさっきの行為にいたったのだ。

普通的女子生徒なら悲鳴を上げるだけだろう。

「そんなに気にするの？ だったら、親に告げ口しようかしら。慶介に強要されて性器を手愛撫しましたって。きっと両親は本気に受け取るわ。そうすれば、コーチをク

びになるところか、就職先もままならないわねえ」

意地悪のつもりで、少女は口に出した。

すると、吃驚するほど慶介の顔色が青ざめる。生気を吸いとられたような面持ちで狼狽えた。

「まさか、本気なのか……」

「どうしようかしらね。だって、真凜の体を見て勃起したんでしょ？ 慶介の事情は関係なしで、変×コーチと捉えられても仕方ないわよ」

つい、正論を吐いた。

「悪かったと土下座しても許してもらえない。そこは真凜に任せるしかない。開き直るつもりはないしね」

観念したように青年はがつくりと頭を垂れる。

（ここまでイジめる気はなかったけど……）

彼がロリコンで欲情する性癖でないことは知っていた。だったら、どうして射精するまで牡欲が爆発したのか理由を知りたい。ある程度、好意を持ってくれているのではないかと期待していた。

「慶介は真凜のこと嫌いなのか？」

ずばっと少女は切り込んだ。

「いや。好きだよ」

青年の返事のほうが直球だった。

あまりにも躊躇のない返事に真凛は戸惑ってしまう。

「どれくらい好きなのかしら？」

悪戯っぽく嗤いながら少女は床に座った。

「おいおい。俺は妻帯者だぞ。その話は別のときにしよう。とにかく、真凛がさっきのことで傷ついたなら、どんな形でも責任はとる」

「マジにならないで」

ぴしやりと真凛は言う。

慶介は真凛が恋心を抱く青年で、奥さんがいる。たとえばペ×スを手コキしたからと言って、事件にするつもりなどさらさらなかった。

少女の気になる事情は陽菜に対する感情だった。

「陽菜のことも好きなんですよ？」

「どうだろうなあ……」

思わせぶりな様子で慶介は視線をそらす。

「今度のシード候補にしてください。そうすれば、真凛がオクチでシテあげるわよ。どうせ、勃起しているんだしょ？」

青年の股間を見つめて、微笑む。

ジャージズボンのそこはテントを張っており、ニョキりと野太い盛り上がりがあつ

た。さっきの手愛撫の射精から三十分も経過していない。

（タフなのね……）

彼の年齢になると性的欲求が蓄積するらしい。ドクドクと脈動した肉柱の昂りが右手に蘇った。我ながら思い切ったことを口にしたと少し後悔の念が走る。

「うっ、変なことおいうな」

慌てて慶介は右手のポケットに手突っ込む。

屹立を腹這いにするので、青年は手一杯のようだった。そこまで、真凛は自分の体で欲情されるとは思っておらず、複雑な心境になる。

相手は立ったままだった。

「変てなによ……ホラ！」

「ぐおっ、お前は何をしたいんだ……」

ズボンの縁をつかんで、一気に脱ぎおろす。目の前をぶんつとうなりを上げて、肉棒が唸った。まもなく、バチンッとお腹を打つ。

「ちょ、ちょっと待て……そこまでする由縁もない。おい、勘弁してくれよ。お前になにをするために……ぐおっ」

コーチを床のうしろ側に押し倒し、真凛が覆い被さる。

「冷静になりなさい。セックスの意味をわかっていて、俺をからかっているつもりなんだろ？」

慶介は声をどもらせて取り乱す。

そんな仕草は幼馴染で遊んでいたころから変わっていない。彼の思っていることは手に取るように真凛にはわかる。

「わたし、セックスしてあげるなんて……ひとことも言っていないわ。どうやったら、都合よく飛躍した解釈になるのか、教えてください」

「とにかく離れなさい」

「いやよ。ここをまた大きくしているコーチに襲われるかもしれないもの。キチンとどういふことか、説明してもらわないと……」

真凛は左手でそろりと肉柱を撫で上げる。指先が裏スジを軽く触っただけで、青年の股間はビクンと跳ね上がった。くねくねと指先で亀頭を弄る。

（もう、気持ちよさそうな顔を……）

本人は我慢している様子だったが、暴走する煩惱と格闘しているのはあきらかである。指腹が肉竿を圧して、亀頭冠を刺激すれば、ぴくぴくと牡棒は面白いほど反応した。

「それから手を離しなさい」

「それって？」

「だから、その……チ×ポだよ」

「手愛撫は飽きたからかしら？」

「ちがう。気持ちよくておかしくなりそうだ。でも、お前は生徒で俺は教師だ。もう、これ以上は……う、うむっ……」

下腹部に移動して、少女は肉棒を両手で握り直す。細い十本の指では収まらないほど、慶介のペ×スは長く逞しいモノだった。

「とても大きいわ。太いし、硬い……」

「おい！ 頼むからやめてくれ！」

泣き声で青年は優しいマスクを崩す。

（外見と違ってオチ×チンは金メダルモノね）

異性の性器など、本来は触れるのも嫌な性分である。男に潔癖症な真凜の性格からは今の行為そのものが説明できない。無理にこじつけるならば、彼に対する好意がそうさせているのだろう。

「ダメ……慶介、本当にやめて欲しいの？」

白いシャツと鎖骨の間から覗ける膨らみに彼の視線を感じた。恥じらいの気持ちも好意の裏返しと受け止めて、ゆっくり亀頭を右手で撫でた。

「ぐおお、やめてくれ……また射精してしまう……」

「相当溜まっているのね。いいわよ。出してもらっても。でも、シャツの予備がないから、服を汚す真似はしないでちょうだい」

それから、相手と視線を交わしたまま、真凜は股間に顔を埋めていく。チュツと尿

道にキスをする、青年は弓なりに体を反らす。

「チ×ポがもげそうだ……燃えちゃう」

「そんなに気持ちいいの？ ウフフツ、ふうん……」

性器の切っ先に接吻するのも、普段ならば真凛はするはずもない。彼氏にもしたことがないのだ。

可愛らしい喘ぎ声を上げる青年に、少女の口愛撫はとまらない。

（変な臭い……）

これが精液の香りなのだろうか。

すでに一発目のザーメンは乾いて肉柱に薄い膜を張っている。白い指で擦り上げると、粉となって舞う。

ここからはまったくの未体験ゾーンに入る。

「ペロペロツ……はうむ」

「んおっ、舌で舐るな……んあっ」

「そうやって暴れないのね。ここが気持ちいいのかしら」

相手が慶介のせいか、奉仕には抵抗心がない。むしろ、牡欲に振る舞わされる幼馴染の様子を拝めるのが嬉しくて仕方ない。

（跳ねのけようとしなくなった……）

さっきは肩を押された。やはりコーチとしての体面があるのだろう。額に脂汗を掻

いて、真凜を突き離そうとした。

ところがいまは違う。

「亀頭ばかり舐めるなあ……裏スジを指先でコリコリしてはいかん。んおっ、ほおっ……舌でカリは……」

「やめろっていうことは、全部やって欲しいってことなのね。いいわ。これで真凜がシード権を獲得できれば……」

右手の親指で裏の筋をねんごろに押し撫でる。同時にキスの嵐を浴びせて、カリへ舌を這わせる。

ここで、ついに慶介が折れた。

「わかった……わかったからやめないでくれ。うっ、シード権の代わりに三回転は飛んでもらうぞ……」

「やった！？ それで、真凜と慶介は愛人関係成立なのね」

「誰がそんなことまで……んおっ、激しくするな」

甘えるような上擦り声で彼は肉悦を吠える。

（やっぱり慶介は真凜が好きなのね）

なぜか嫌悪感はない。湧き出るのは好奇心と歓喜する慶介への愛しさだけだった。自然と指遣いは柔らかくなり、舌の動きも滑らかに変わる。

その動きは青年にとめどない快樂を与えていった。

「硬くなって、ドクドク脈打っているわ」

薄皮を被る肉柱には無数の静脈が浮かんでいた。指先が弾き飛ばされそうな気分になった。

「ああっ、マズい……このままだと……」

「ウフフツ、出そうなのね。いいわよ」

「良くない！ 真凛のクチに出せるかつ、あぐつ、ティツシュを出してくれ。頼む、なにかを……」

絶頂間近になって、慌てて慶介は周囲を見わたした。

「ホラ、こうすればいいんですよ」

「お、おおっ……」

一瞬、股間が大きく波を打つ。

野太い怒張に真凛のぽってりした口輪がかぶりついたのだ。少女自身、自分の行為が理解できない。ここまで奉仕する必要はないのに……。

（ああっ、熱いのがきているっ……）

美麗な小顔に汗が光る。幼気なあどけなさが残る真凛のクチに、獰猛な牡棒が突き立てられていた。両手に何かがせり上がる感触が伝わる。ぎゅっと目を閉じてペコリと頬を窪ませる。

「ぐおおおっ……ダメだ、イクぞ……真凛！」

「んんんぐっ、あんんっ……んんんんっ」

瞼を跳ね上げてはぎゅっと落とす少女。粘度の高い白濁液が一気に噴出し、真凜の喉奥を犯す。その水圧、濃厚な生命の香り、粘度の高さ、すべてを受けとめて、一心不乱に白い喉がうねっていた。

く続きは本編でお楽しみください

法的拘束力を持つ重要事項および購入者同意契約

本文書は、成人向け官能小説作品（以下、「本作品」という）を公開・販売するにあたり、著者（以下、「当方」という）と購入者（以下、「貴殿」という）の間で締結される法的拘束力を持つ同意契約です。本作品の購入、ダウンロード、閲覧、またはその他の方法でのアクセス行為により、貴殿は本免責事項の全条項に完全かつ無条件に同意したものとみなされます。同意できない場合は、

本作品の購入・閲覧を直ちに中止してください。

一年齢制限および法的確認

本作品は日本国内法において成人と認められる18歳以上の者のみを対象としています。

本作品の閲覧・購入により、貴殿は自らが法的に成人年齢（18歳以上）に達していることを宣言・保証し、これに虚偽があった場合のすべての法的責任を負うことに同意す

るものとします。

貴殿は、本作品を未成年者に提供・共有・販売・貸与しないことを誓約します。

貴殿は、本作品の閲覧にあたり、貴殿の居住地および閲覧地の法令で成人向けコンテンツの閲覧が許可されていることを確認し保証するものとします。

二 コンテンツの性質および免責

本作品には、明示的な性的描写、成人向けの要素、およびその他センシティブな表現が含まれています。

本作品に登場するすべての人物、場所、団体、事件、状況は完全なフィクションであり、実在の人物（生存者・故人を問わず）、団体、事件、場所とは一切関係ありません。いかなる類似性も偶然の一致であり、意図的なものではありません。

本作品で描写される行為、状況、関係性は、現実世界における法的・倫理的・道徳的価値観を反映するものではなく、また推奨・奨励・助長するものでもありません。

本作品は芸術的・文学的表現の自由に基づく創作物であり、表現の自由を保障する憲法その他の法令により保護されています。

貴殿は、本作品の内容が貴殿の想像力を刺激し感情を喚起する可能性があることを認識し、それらに対する対処は貴殿自身の責任であることに同意するものとします。

三 個人の感性と判断の完全責任

性的表現や官能的描写に対する感じ方は個人差があります。貴殿は完全に自己責任において本作品を閲覧するものとし、その判断と結果について当方は一切の責任を負いません。

貴殿は、本作品の内容が貴殿の個人的価値観、信条、宗教的・道徳的・倫理的信念に合致しない、または挑戦的である可能性があることを明確に理解し、それにより生じる精神的・感情的反応について当方に責任を求めないことに同意するものとします。

貴殿は、作品内容に不快感や心理的動揺を覚えた場合、直ちに閲覧を中止することが貴殿自身の責任であることを認め、これを怠ったことによる結果について当方に一切の責任を求めないことに同意するものとします。

貴殿は、本作品を閲覧することによって引き起こされる可能性のある感情的、心理的、または精神的影響について当方が責任を負わないことを明示的に同意します。

四 販売プラットフォームの規約と購入形態

本作品は、各販売プラットフォーム（note、DLsite、FANZA、その他EPUB形式で配信するプラットフォーム）の規約に準拠して制作・販売されています。

貴殿は、プラットフォーム固有の利用規約および制限事項をすでに確認し理解したことを確認するものとします。

貴殿は、本作品がもともnoteで公開された記事をEPUB形式に変換・編集して販売されている場合があることを理解し、それによる内容の差異や形式的特性について異議

を唱えないことに同意するものとします。

貴殿は、購入後のPDFファイルの管理は完全に貴殿の責任であり、ファイルの紛失、破損、または意図しない拡散について当方は一切責任を負わないことに同意するものとします。

五 著作権および厳格な利用制限

本作品のすべての内容、テキスト、キャラクター、設定、ストーリー、アートワーク、およびその他の創作的要素に関するすべての権利（著作権、商標権、その他の知的財産権を含む）は、完全かつ排他的に当方に帰属します。

貴殿は、以下の行為を明示的に禁止されることに同意するものとします..

本作品の全部または一部の複製、再配布、転売、貸与

本作品の全部または一部の公開朗読、朗読配信、公開上映

本作品の翻訳、翻案、改変、二次創作、派生作品の作成

本作品の内容に基づく商品化、グッズ制作

本作品を利用したAI学習、データベース構築、テキストマイニング

本作品の全部または一部をSNS、ブログ、メッセージアプリ等で共有することその他、当方の権利を侵害する可能性のあるあらゆる利用

貴殿は、本作品を個人的に楽しむ目的でのみ使用できるものとし、それ以外のいかなる目的での使用も厳格に禁止されます。

上記の制限に違反した場合、当方は法的措置を含むあらゆる適切な手段を講じる権利を留保し、貴殿はそれによって生じた法的費用を含むすべての損害の賠償責任を負うことに同意するものとします。

六 完全な責任免除および法的保護

当方は、本作品の閲覧、使用、または本作品へのアクセスができないことに起因して生じたいかなる直接的、間接的、偶発的、特別、懲罰的、または派生的損害（心理的、精神的被害、評判の損害、事業の中断、データの喪失、利益の損失を含むがこれらに限定されない）についても、たとえそのような損害の可能性について当方が知らされていた場合であっても、一切の責任を負わないものとします。

本作品の解釈、内容理解、および閲覧後に貴殿が取る行動や受ける影響については、完全かつ排他的に貴殿自身の責任であり、これに関連するいかなる請求からも当方を免責・防御・保護することに貴殿は同意するものとします。

貴殿は、本作品に関連して第三者から当方に対して提起されるいかなる請求、訴訟、要求、費用、責任、および支出（合理的な弁護士費用を含む）についても、貴殿の本免責事項違反から生じた場合、当方を防御、免責、および損害を与えないことに同意するものとします。

適用法で許可される最大限の範囲において、当方の総責任額は、貴殿が本作品に対して支払った金額を超えないものとします。

一部の法域では特定の保証の除外または責任の制限を認めていないため、上記の制限の一部は貴殿に適用されない場合があります。しかし、法律で許可される最大限の範囲で制限が適用されるものとします。

七 プライバシー、セキュリティおよびリスク認識

貴殿は、本作品の購入・ダウンロード・閲覧履歴が個人のプライバシーにかかわる機密情報であることを認識し、これらの情報および本作品のファイル自体の管理は完全に貴殿の責任であることに同意するものとします。

貴殿は、共有デバイス、公共の場所、職場環境、または第三者がアクセス可能な環境での本作品の閲覧・保存に伴うすべてのリスク（社会的評判、雇用関係、人間関係への潜在的影響を含む）を完全に理解し、そのようなリスクから生じるいかなる結果についても当方が一切責任を負わないことに同意するものとします。

貴殿は、インターネット通信、クラウドストレージ、デジタルデバイスに固有のセキュリティリスク（ハッキング、不正アクセス、マルウェア感染、データ漏洩など）を理解し、本作品の購入・保存・閲覧に関連するそのようなリスクについて当方が一切責任を負わないことに同意するものとします。

貴殿は、本作品の Epub ファイルまたはその他のデジタル形式が、技術的な問題、互換性の問題、またはデバイスの制限により正しく表示または機能しない可能性があることを認識し、そのような技術的問題について当方が責任を負わないことに同意するもの

とします。

八 問い合わせと紛争解決

本作品に関するご質問、ご意見は連絡先までお寄せください..

当方は問い合わせに対する回答義務を負わず、回答の有無、内容、タイミングはすべて当方の裁量によるものとします。

本免責事項または本作品に関連して生じるいかなる紛争も、日本国の法律に準拠するものとし、地方裁判所を第一審の専属的合意管轄裁判所とします。

九 可分性と完全合意

本免責事項のいずれかの条項が無効または法的強制力がないと判断された場合でも、残りの条項は完全に効力を維持するものとします。

本免責事項は、本作品に関する貴殿と当方の間の完全な合意を構成し、書面または口頭を問わず、本件に関する以前のすべての理解、合意、表明に優先します。

本免責事項は、当方の書面による明示的な同意なしに変更または修正することはできません。

十 承諾と効力発生

貴殿は、本作品を購入、ダウンロード、閲覧、または他の方法でアクセスすることに
より、本免責事項をすべて読み、完全に理解し、法的拘束力のある合意として無条件に
同意したことを認めるものとします。

本免責事項への同意は、貴殿による本作品へのアクセス時点で効力を生じ、永続的に有効であり続けるものとします。

法的通知… 本免責事項に同意せずに本作品にアクセスした場合、著作権法違反および契約違反となり、法的措置の対象となる場合があります。同意できない場合は、直ちに本作品の閲覧を中止し、すべてのコピーを削除してください。

本免責事項に同意された上で、作品をお楽しみいただければ幸いです。

最終更新日…二〇二五年三月二十九日

著者名…宇佐見翔